

# 読書通信



No. 160

① 国体とは何か。戦前戦中なら天皇が統治する国柄または国民が天皇のために死ぬる君主制というようなことだったろう。白井聡『国体論 菊と星条旗』（集英社新書、1015円）の厳しい視線は戦後の「国体」に向けられる。つまり占領体制下の日米関係がその後60年以上も日本に定着し、世界にまれな「非独立国」であり続けているという指摘である。日米安保や日米地位協定のような対米従属の構図、トモダチ作戦や思いやり予算などの情緒的用語が戦後の国体を形成し、それが日本の行き詰まり状況を一貫し

ほど崩壊していることが明らかにされる。これほどの一大事はない。明快かつ説得的な内容で、子も親も祖父母も必読の一冊である。

③ 福島原発事故直後の2011年7月1日、飯館村の菅野村長が経済倶楽部で講演した。全村避難が始まったばかりだというのに、ユーモアと復興への強い意志を込めたすばらしい講演だった。司会をしていて胸が熱くなったことを昨日のことに思い出す。あれから7年、菅野典雄『までのいの村』に帰ろう』（ワニブックスPLUS新書、896円）は、柔軟だが芯の強い菅野さんの村を愛する気持ちを縦糸、首長としての知恵と行動と執念を横糸として執筆されている。「放射能事故の加害者と被害者の立場を超えた先に復興がある」との主張は強い説得

て説明しうる最有力の概念だ、というのが著者の言い分である。石橋湛山賞受賞の『戦後』の墓碑銘』をさらに展開させていて極めて論争的だ。戦後の国体へのアンチテーゼとしての平成天皇のおことが高く評価されている。

② 世はAIブーム。AIにできないことはない。新井紀子『AI vs 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社、1620円）はとても刺激的で人について話したくなる本である。「東ロボくん」こと東大入試に受かるためのAI開発の責任者である著者だからこそわかったAIの決定的弱点から、AIが人間を超える日は絶対にやっこないこと、そして肝心の小中高生の文章を読む力がスマホ漬けのおかげもあって驚く

力を持つし、「苦悩と決断と感謝の7年」とはなかなか言えない言葉だ。「までのい」とは講演でも拝聴したが「丁寧に、心を込めて」の意という。

④ 私事ながら両親とも在宅で身まかった。介護した妻は大変だったと思うが、希望かなった二人は本当に満足して旅立った。国のデータでは国民の77%が病院で死に、自宅は13%、介護ホームが8%だとか。山崎章郎『在宅ホスピス』という仕組み』（新潮選書、1404円）は在宅看とりが病者の尊厳という点でいかに幸せかという立場から、地域包括ケアによる在宅ホスピスの可能性と条件を詳細に分析、紹介している。日本の在宅ホスピスには多くの課題があるが、それを乗り越えてきた著者の格闘の跡は読む者を必ずや感動させるだろう。（浅野 純次）